

12

芭蕉翁の終焉の地に立って



碑を見守る又一ビルの外壁

御堂筋のカーブ

ちらりと町歩きマップを見て、意外なポイントに目が留まったのが、ここ芭蕉翁終焉の地の碑。「旅に病んで——」の辞世の句を詠んで北陸の少し下ったところで死んだのでは、と漠然と解釈していただけに意外であった。しかし一方、仲間と文学談義を交わしていたとき、芭蕉はふぐに当たって死んだ」と耳にしたことがある。大阪では、ふぐは鉄砲といわれてきた。当たれば死ぬところからの呼称であろうが、芭蕉のふぐ死はいかに大阪にふさわしい。彼の美食ぶりの一面がうかがえる気もする。

この地は当時どんな家だったのか、どんな臨終だったのか。碑のある久太郎町3丁目角のグリーンベルトでも想像できなかったが、その解答は向かいの南御堂・難波別院にあった。パンフレットをみると「元禄7(1694)年9月9日、伊賀上野から大阪へ入る。目的は門人の対立の仲裁であったらしい。翌日の晩より体調を崩し、ふるい、寒気、熱、頭痛になやまされ、29日夜、下痢で床に臥し、その後日ごとに容態が悪化した。10月5日に門人の家から南御堂前の花屋の奥座敷に移され、左右の人々をしりぞけて、不浄を浴し香を焼いて後、安臥して物言わず、12日の午後臨終となる」とある。芭蕉翁終焉記「笈日記」からの抜粋だった。

最期の句碑が御堂奥の庭に立っていた。51歳の芭蕉の一生を総括すると、芭蕉にとって全国行脚の目的は門下の人々との出会いもあったが、自然や人間社会の厳しさを知りながら、その恵み、愛、幸せを発見するディスプレイジャパンだったのかもしれないと思ふ。

碑のすぐ前では、レトロっぽい模様の入った又一ビルの外壁。ビルの側面の説明プレートに「南御堂難波別院によって建設された旧大谷仏教会館の外壁の一部である。又一ビルディングの建設に際して、御堂筋のゆかりの深い遺産としてこれを保存し、末永く沿道の景観に寄与しようとするものである」と添えられていた。日付は昭和60年5月1日とある。この時期は経済発展の絶頂期でもあったのに、文化を支える経営者が現れたことは、御堂筋の大きな遺産だと思う。今日はいずれの発見の日だった。

